

分布：沖縄を除く全国

# ガマ (ガマ科)

学名: *Typha latifolia*

蒲 別名：御簾草(みすぐさ)、かば、かま

## 主な生育場所

ため池や休耕田、湿地など流れのない水辺に生育する。水田に生えることもある。また、大量の種子が飛散するため、時に一時的な水たまりの跡やコンクリートの隙間などでも生育することがある。

## 特徴

高さ2mにも達する大型の多年草で、種子と根茎によって繁殖する。円柱状の白くて柔らかい根茎は、泥中を這う。濃い緑で線形のねじれやすい葉は幅は2~4cm。夏期に葉間より堅い茎を伸ばし、直径2cm以上で円筒状の花穂をつける。花穂は熟すと赤褐色となり、やがて崩れて綿毛をつけた大量の種子が風によって飛散する。



名前の由来：日本語の祖先にあたるアルタイ語系のヨシ(葦)を意味するkamaが、きわめて古い時代に「カマ」そして「ガマ」に転じた可能性があるという。(『日本語の起源』村山七郎から)

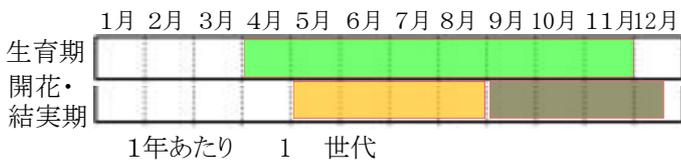
## <農業との関係>

飛散した種子からの発芽直後は、耕起によって簡単に駆除できるが、いったん定着すると、地下茎を縦横に伸ばすため駆除が難しくなり、不耕起田に入り込むと厄介となる。また、湿っぽい休耕田で群生しやすく、復田に際してはヨシと同様に地下茎の除去に苦勞することとなる。水深の浅いため池にもしばしば蔓延し、取水の障害となるため、定期的な刈り取りや泥上げ等が必要である。



崩れて綿毛がむき出しになった熟した花穂

## <生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 葉の幅が2cm以下と狭く、花穂の直径が2cm以下となるヒメガマも高さは2m以上に達し、ガマと混生することも多い。ヒメガマと同様に葉の幅が狭く、高さが1.5mほどにしかならないコガマは、西日本であり見られない。

## <一言うんちく>

ワニに赤むけにされた因幡の白兔が、通りがかった大黒様に教えられてガマの穂にくるまって傷を癒したと思われていますが、「古事記」の原文によると、大黒様が教えたのはガマの花粉(蒲黄)に身を置くことでした。ガマの花粉には切り傷ややけどに効果があるとされています。



葉幅が狭く花穂が細長いヒメガマ

## <人との関わり合い>

ガマの穂綿はかつては、火口に利用されたり、布袋に入れて蒲団(布団)とした。また、花穂を干したものを蠟燭や松明の代用にもされた。さらに若葉は食用、穂黄は薬用、茎はむしろなどの編み物に利用されるなど古来から身近な有用植物としてさまざまに活用されてきた。また、練り製品の「蒲鉾(かまぼこ)」は、古く、竹の棒に白身魚のすり身を筒状に巻いて作られ、その形状がガマの穂に似ていることから名付けられた。ウナギもかつては開かず(かま)に串刺しにして焼いていたことから「蒲焼き」とされた。

## <俳句や短歌への登場>

【季語:夏】

蒲の穂や蟹を雇て折もせん (其角)

蒲の穂にひとひら白き冬の蝶ふと舞ひあがる夕空の晴 (北原白秋)

蒲の花目にめづらしく咲きたれば葦むら分けて舟曳かせけり (橋田東声)